

障がいのある方などの避難支援を考えよう
一人ひとりの命と暮らしが守れる地域づくりに向けて
できることから始めよう！



認定NPO法人レスキューストックヤード
常務理事 浦野 愛

避難行動の基本的な流れ

揺れた！

地震の揺れから
身を守る



避難だ！

・自宅に残る
・避難所へ



揺れがおさ
まった！

・周りの状況を確認
・避難の準備



・津波、火災、液状
化、土砂災害注意
・一人で逃げられな
い人を手伝う

避難行動要支援者とは？

災害が起こった時に、

『自力で安全な場所まで避難するのが難しい人』で、
家族や親類だけでは対応できず、周囲の手助けを必要とする人

●例えばこんな人

情報の入手や判断が難しい
移動が難しい

過去の災害の事例1

重度障がい者5日間のまず食わず

1995年阪神・淡路大震災



●エレベーター停止。

市営住宅10階に取り残された

●高齢の母は外に助けを呼びに行けず

●5日後たまたま通りかかった福祉施設職員に発見され、避難所へ

過去の災害の事例2

視覚障がい者浸水に気づかず逃げ遅れた！

2000年東海豪雨水害



●河が決壊。壊睡眠中

●頭の後ろに水がついて
初めて浸水していると認識

●道路は既に冠水。周囲
の状況や安全な道が判断
できず2階にとどまった

過去の災害の事例3

老々介護の深刻さ

2011年東日本大震災



●石巻市では死者の内19%が寝たきり高齢者

●逃げなかった理由は、「夫を残していけない」「自宅で家族の迎えを待っていた」「もう死んでもいい」

●平日の日中は家族が出払っていて、津波警報が出ていても避難できなかった

陸前高田市民生委員さんのコメント

特定の人だけが情報を持っていても間に合わない



● 普段の見守り25世帯を回り近所の人と逃げるよう促した

● 20分で10件に声かけ。そこに津波襲来

● 自主防災組織や消防団、住民らとの協力体制をより強めていかなければ。民生委員だけ情報を持っていても緊急時は対応しきれない

被災地の課題 避難行動要支援者

夜中、背中が冷たいのでびっくりして起きたら浸水していた
(聴覚障害者)



何が起こったのか、どう行動すればいいかがわからず、恐怖の中自宅にとどまった (外国人)

避難しようにも、冠水した道を車椅子では移動できなかった
(肢体不自由)



パニックを起こし落ち着かせるために必死だった
(知的障害児の親)

夜鳴きがひどくて、とても避難所では生活できなかった (乳幼児を抱える親)



「逃げられん。あきらめよう」と二人で覚悟した
(後期高齢者世帯)

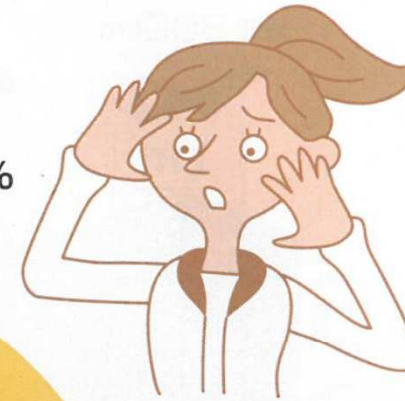
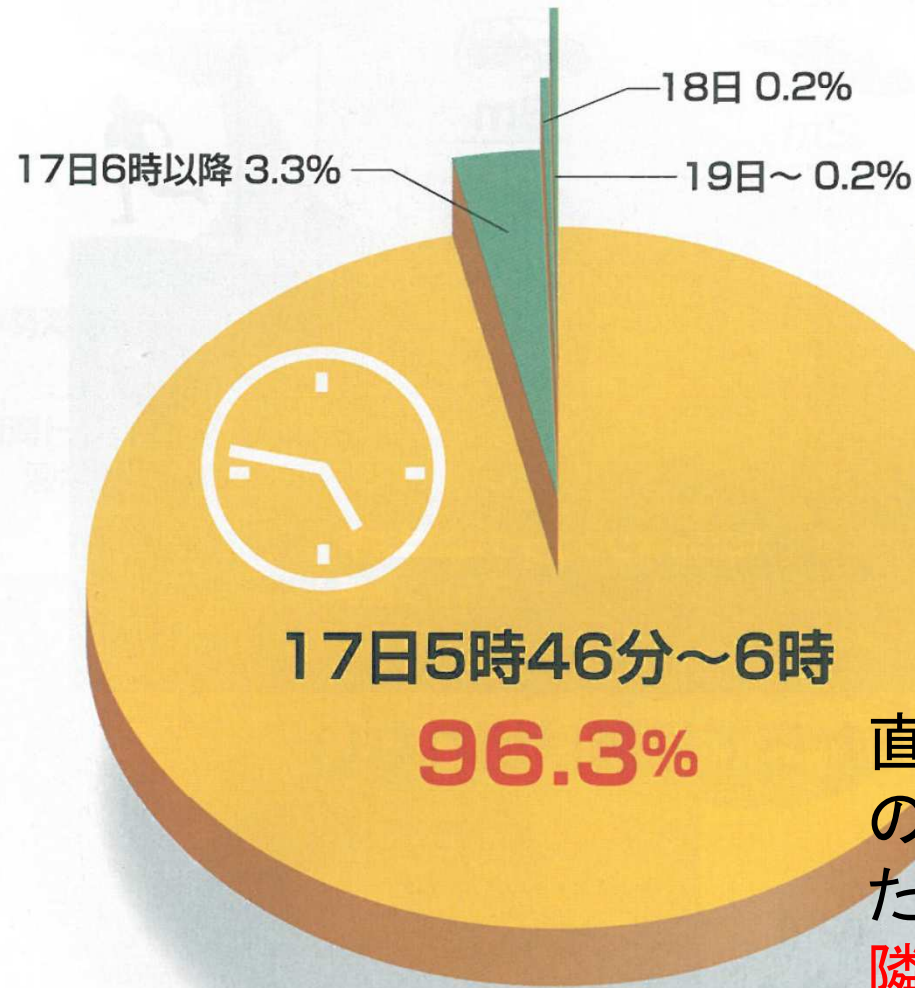
普段「知っている・気になる」ことが強みなじみの顔でさらに安心

- とにかく好きな人から助けた。(阪神・淡路大震災)
- 震災前から「福祉マップ」で「何かあったら心配だな」と気になる人を把握。手分けしてすぐに安否確認ができた。私の顔を見るなり「怖かった。来てくれて嬉しい」と泣き崩れた。
(能登半島地震・輪島市・穴水町)

- 揺れの後、自治会長が各家を訪問。「ブレーカーなどを落として避難を！」と声をかけ、死者・火災なし。
(長野県神城断層地震・白馬村)



ほとんどの人が即死だった



直後の救助に当たれるのは近くにいる動ける人たちでしかない
隣近所、企業、学校・・・
様々な人たちと繋がろう

兵庫県南部地震における
死者(神戸市)の死亡推定時刻(監察医検案分)

西村明儒ほか、救急医学1995/10より

阪神・淡路大震災 救助を求めていた人3万5千人

地域住民による救出
77%

自衛隊・消防隊による救助
23%



7,900人

そのうち半数以上
が遺体の救出

そのうち約8割が
生存者の救助

27,000人



被災者が一番伝えたいこと～宮城県七ヶ浜町・被災者の命のメッセージ～
どこに誰がいるのか分かっているのはやっぱりご近所さん



●自宅で片付けをしていたら、「早く逃げろ！」「近所に身体
の動かない人寝たきりの人は
いないか？」と消防団の声。

●13年間、自分で歩くこともで
きない一人暮らしのおばあさ
んの顔をふと思い出し、ひよっ
として…

●おばあさんは一人、部屋で
ぶるぶる震えていた。



相澤 勝子 (69歳)

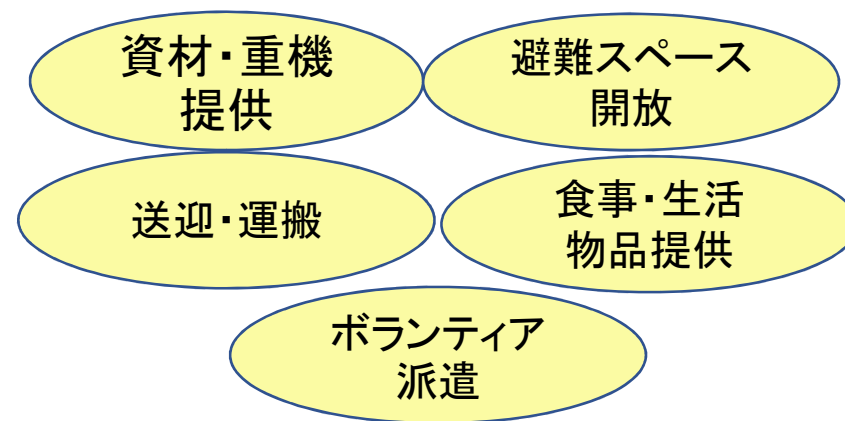
震災時住所：花刈浜地区

現住所：七ヶ浜中学校第2グラウンド

応急仮設住宅

2013年12月2日河北新報より／気仙沼市ヤヨイ食品気仙沼工場
従業員が誘導、住民救う

- 従業員らは住民に呼びかけ、素早く避難行動を開始。
- 歩行困難なお年寄りの手を引いて階段を上った。寝たきりの女性は、担架に乗せて運び上げた。
- 普段から住民が訓練に参加。落ち着いて行動できた。
- 自宅は全壊した。助かったのはヤヨイのおかげだ。



被災者が一番伝えたいこと～宮城県七ヶ浜町・被災者の命のメッセージ～
毎年の訓練参加で、ダウン症の娘がすぐ避難



●ダウン症の娘に、避難場所と逃げ方を教えるために地域の防災訓練に毎年参加。

●家族みんなが約束どおりの場所に避難。訓練は無駄ではなかった。

●家族が集合場所にたどり着くまで地域の方が声かけ



山口 ゆかり (45歳)

震災時住所：菖蒲田浜地区

現住所：七ヶ浜中学校第2グラウンド
応急仮設住宅



命を守る避難行動計画づくり
取り組みのヒント！

自分が助かる
ための準備

近くの人からの
声かけ・救助

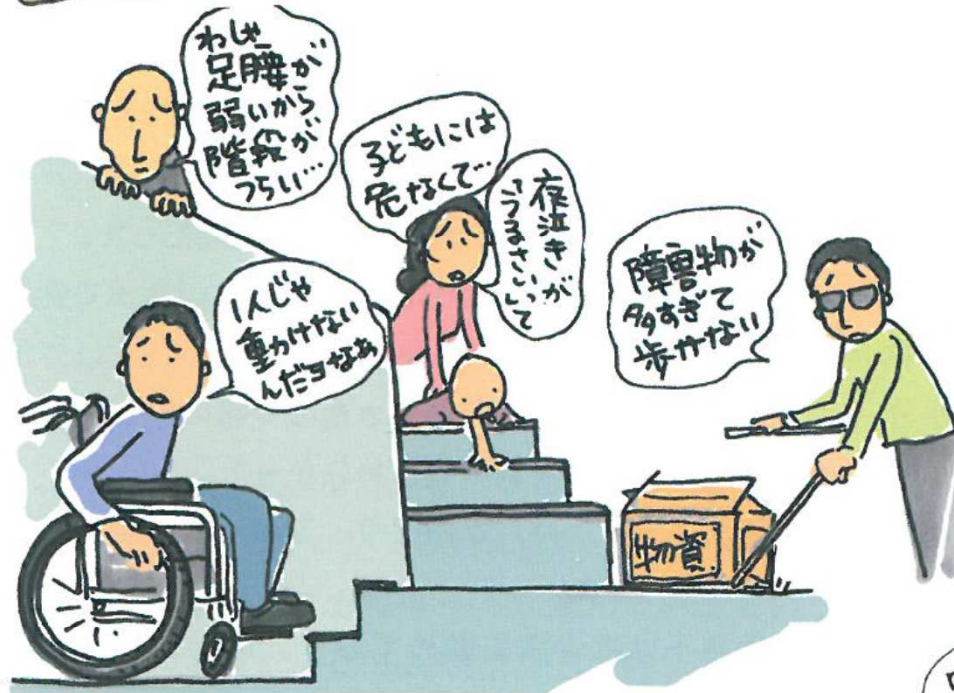
支援の要は『地域』
互いの存在の記憶

様々な地域資源
との協力

日常の訓練
の積み重ね

もう一つの課題 避難所

避難所ってどんなところ？



指定避難所の光景



西宮市立津門小学校

トイレ 汚い、使いづらい



東日本大震災



寝床 床が硬い、平らな場所から 立ち上がれない



食事 炭水化物中心、冷たい硬 いぱさぱさ...



私たち居場所はどこに？



支えられ避難2ヶ月

2011年東日本大震災

最大で1300人が避難した石巻市の港小。重い意識障害のある湊中3年Tさん(14)の家族5人も約2ヶ月間、ここで生活した。自宅は石巻港から約1kmの距離にある。3月11日、地震の揺れが落ち着くと、家族は車で300mほど山手にある湊小に向かった。父親のNさん(51)が車いすを校舎に運び入れた時だった。黒く濁った泥水が校舎1階の階段に押し寄せた。Tさんは妊産婦や乳幼児がいる家族たち約30人とともに3階の相談室に身を寄せた。たんの吸引など医療的ケアが必要な重い意識障害はTさんだけだった。「1人分のスペースは1畳もなかった。」母親のRさん(44)が避難当初を振り返る。

3月13日、自衛隊のヘリコプターでTさんを石巻赤十字病院に搬送してもらったが、翌日には避難所に戻された。病院は次々と運ばれる患者であふれ、治療を終えた患者が入院できる状態ではなかった。自宅は2階まで浸水した。「電気も水もない。道路も電話もだめ。これでは生きられない」。絶望感で心を締め付けられた家族を支えたのは、地域の人たちだった。

Tさんは生後11ヶ月の時、離乳食をのどにつまらせ、低酸素脳症に陥った。Nさん、Rさんは「同年代の子どもと接するのが最良の教育環境になる」と考え、特別支援学校ではなく、地元の湊小、湊中に進学させた。Tさんの表情は豊かになった。学校行事を通じて、多くの住民とも知り合った。その経験が、避難所生活で生きた。Tさんに付きっきりの家族に変わり、地域の人が食事の支給に並び、洗濯を手伝ってくれた。真夜中のたんの吸引も「気にしないで」と見守ってくれた。「Tちゃんは大丈夫?」と、いつも体調を気に掛ける同級生たちがいた。Rさんは「避難した子どもたちも不安で一杯だったと思うが、それでも一番危うい命だとTを気遣ってくれた」と感謝する。…(省略)…

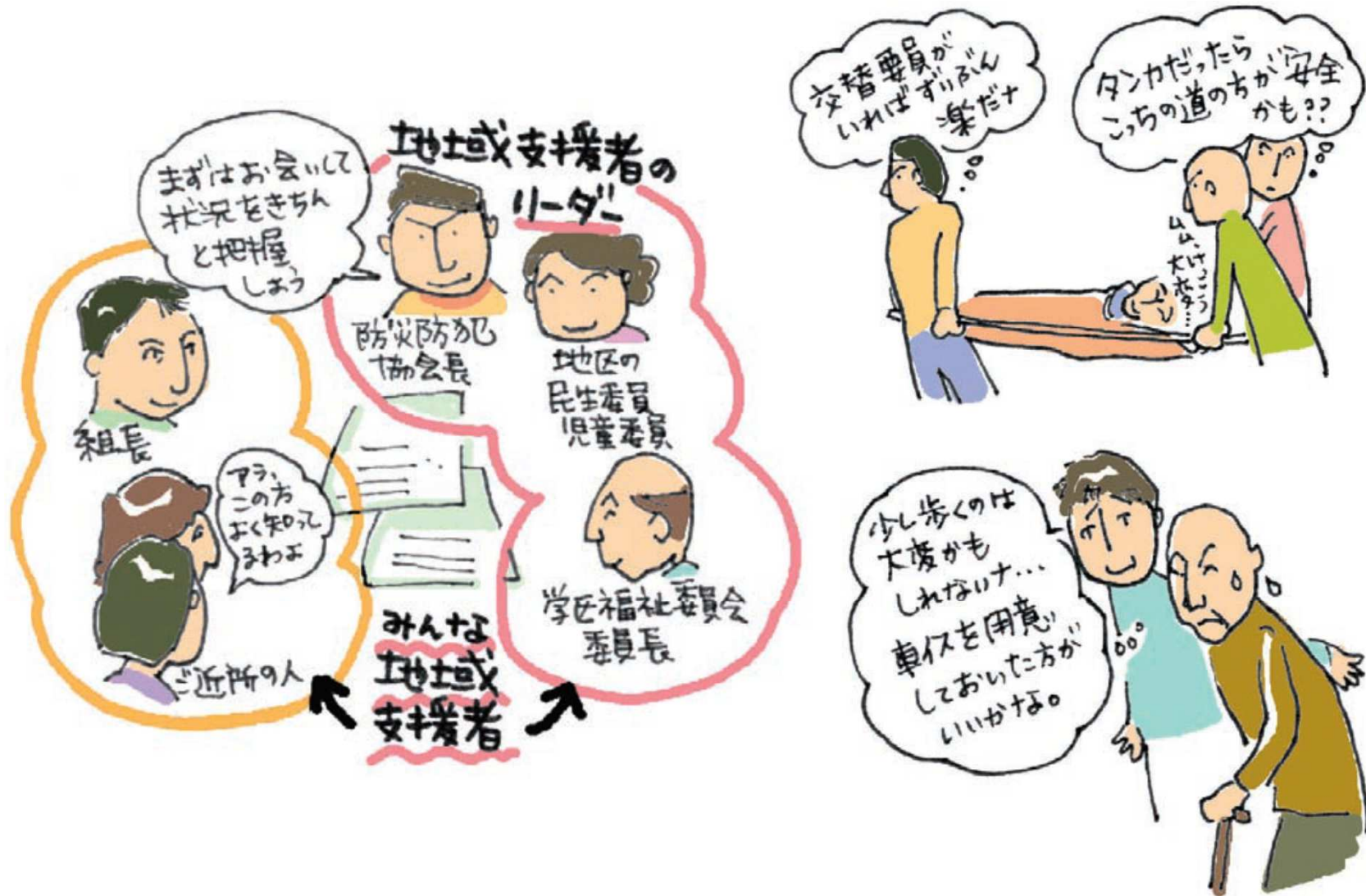
多くの障害児、障害者は居住する地域とのつながりが薄く。孤立しがちだ。やむなく車中や子どもたちの状況をよく知る特別支援学校などで生活した人もいう。「在宅介護する家族と地域の人たちが互いに存在を確認し合うことの重要性が、今回の震災で明らかになった」

(2011年10月26日・河北新報より)

頼りになるのは「ご近所さん」と言うけれど

- 近所の人たちとつながりを作るためには「きっかけ」が必要
- 普段から接点の無い人に、災害があったからと言って「いざという時は地域で協力しましょう」と言っても、戸惑ってしまう。
- 「相手を知らない」「やり方が分からない」ことが互いの壁を厚くさせ、憶測・思い込みを生み、相互の不信・不安となって孤立や見てるだけの状態を作ってしまうのではないか？
- 高齢者や障がい者も地域の一員。「助けられるだけの人」とは考えない

できることからやってみよう！



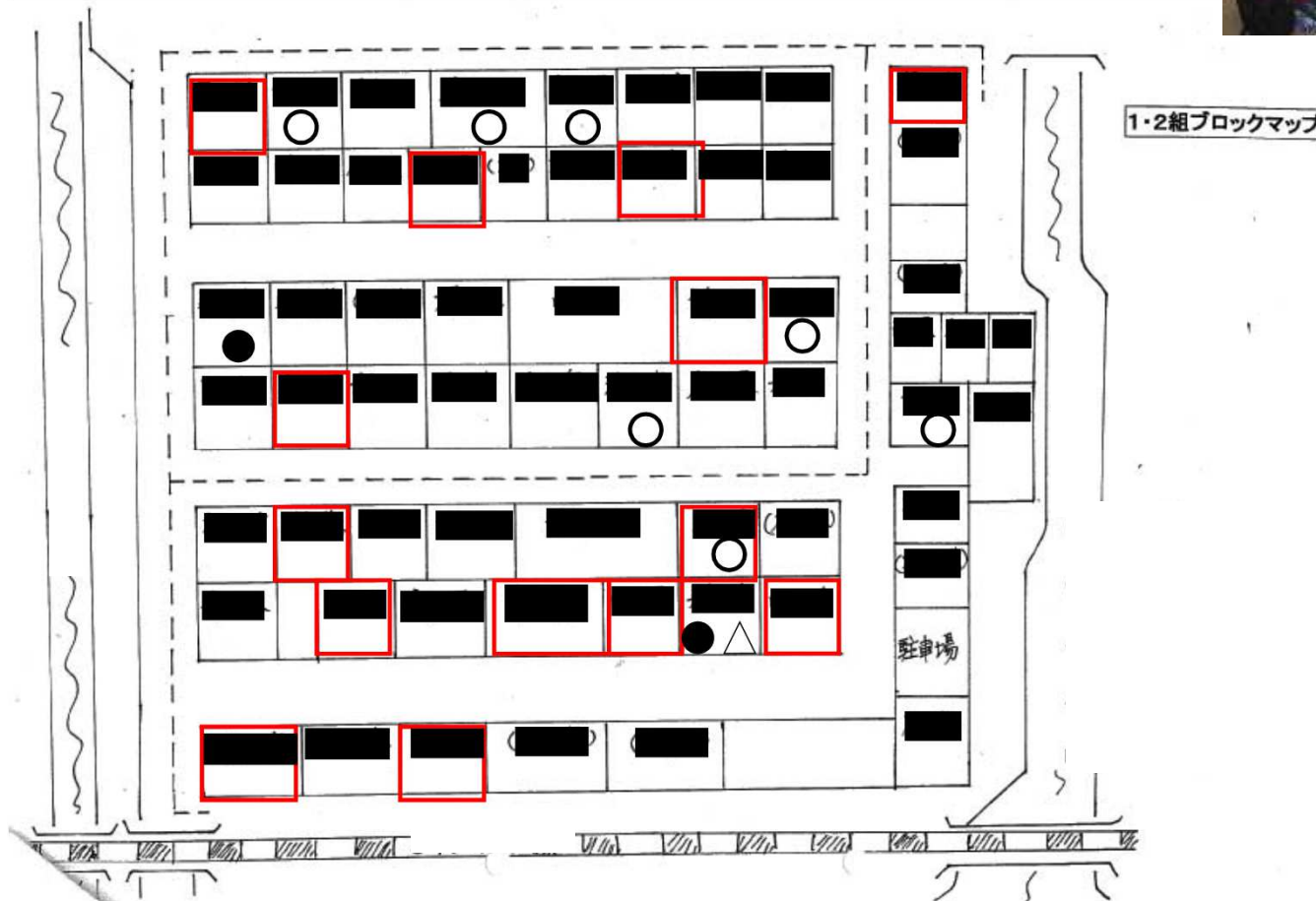
避難行動要支援者対策 3つのステップ

1. 災害時に一人や家族だけで安全に逃げる
ことが不安な人を把握する
2. 一人ずつ災害時のひなん方法を検討する
3. 実際にひなんが上手くいくか、防災訓練
中で確認する

勉強会の場で、民生委員や地域住民から該当者の情報を募り、マップに反映。後日民生委員と町内会長らで名簿登録の声かけ訪問を行った。



蟹江町中瀬台町内会要援護者マップ



- 65歳以上の一人暮らし
- お年寄りだけ
- △ 障がいのある方がいる
- ▲ 小さなお子さんがいる
- 上記以外で支援を必要とする
- ◻ 地域支援者

名簿づくり～活用できる情報を集めよう～

災害時要援護者台帳雛形

災害時要援護者台帳

この台帳は、**町が市からの情報提供及び、本人の申告に基づいて作成したものであり、災害時初期の避難に必要な要件を記載したものです。

No	16
作成日	平成20年7月29日

(取扱注意) (**) 防災防犯協会

組・(組長名)	12組 (明崎 太郎)	
よみがな	ほんだ ただかつ	
要援護者の氏名	本多 忠勝	電話 48-1234
住所	明崎市藤川町字藤川1番地1 ハイツ ふじかわ101号室	
年齢・性別	明治・大正・昭和・平成 15 年生まれ	82歳 男/女
要援護者区分	高齢者・障がい者(身体・知的・精神)・日本語理解不能者・その他	
身体障害情報 (身体記載場合)	上肢・下肢・視力・聴力・言語・内臓疾患	
必要とする 援護・支援の内容	100mくらいならば、杖と介助者がいれば歩行可能 左手が不自由なため、介添えが欲しい	
家族構成 (任意項目)	妻(歳) 50歳の娘と2人暮らし	
緊急時連絡先 (任意項目)	本多 正純	電話 0563-55-1234
	本多 義直	電話 48-9900

主に就寝する場所の平面図(任意項目)

見取図を描くと分かりやすくなります

一番南西の部屋に突いている
日中は洋間にいることが多い

言葉で示すのも、他の人に
伝えやすく有効です

和室	洋間	玄関	子ども 部屋
和室	居間	車椅子は 玄関にある	

ここで突いています

要援護者の状況	自分のことはできるが、避難所までは身体支援が必要
家族等の状況	50歳の娘と住んでいるが、日中は仕事でほとんどいない
個別支援区分	A 家族だけでは無理なので、1人以上の支援が必要 車椅子は玄関にある

ここが重要! 支援のポイント (目安)

これらの情報は、市からの名簿を転記します

[名簿作成のポイント]

ひなん誘導に必要な援助や配慮を把握する

- ① 名前
- ② 年齢
- ③ 性別
- ④ 家族状況(一人暮らし・高齢者世帯)
- ⑤ 身体状況(病歴)
- ⑥ 移動手段(見守り・杖・車いす・担架)
- ⑦ 特記事項(耳が遠いので大声で声かけ必要、
認知症、きざみ食など)



これを聞くことができる...

- ・避難誘導に必要な**支援者の人数**
- ・避難誘導に必要な**道具**
- ・避難誘導時に必要な**配慮**

が明確になり、一人ひとりの支援計画ができる

支援方法の目安

色	項目	目安となる基準
赤色	対象者の条件	・ねたきりなど自力では動けない方
支援者 4名以上	支援方法	・担架、リヤカー、車いすなどの道具を使って避難誘導を行う
黄色	対象者の条件	・自力で動けるが、足腰に不安のある方 ・自力で動けるが、避難判断に不安のある方
支援者 1名以上	支援方法	・見守り程度の避難誘導を行う
青色	対象者の条件	・自力で動けるが一人暮らしの方
支援者 声掛けだけあれば一人でなんとかなる	支援方法	・安否確認を行い、必要に応じて避難誘導を行う

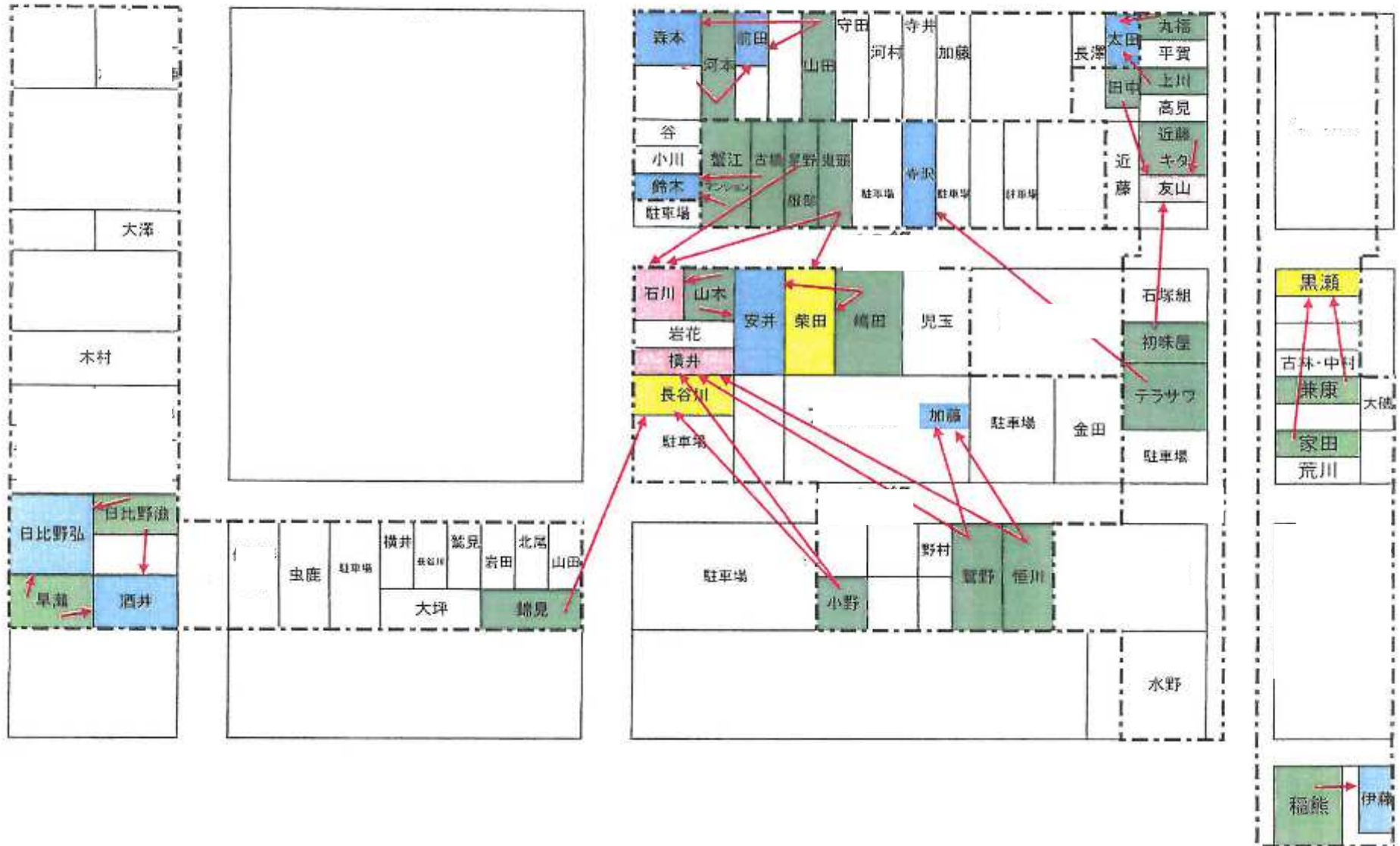
地域支援者4人以上

地域支援者1人以上

声かけのみ

地域支援者

要援護者支援マップ



「地域支援者」として協力を得よう！

住民の声

「自分がどうなるかもわからないのに、人のことまで責任を負えない」

「素人の自分が手伝えることができるのか不安」



自分の命、家族の命が無事で、自分が動ける状態であった時に

①安否確認・声かけ

②ひなん誘導

を、お願いしたい

役割や条件の明確化

地域支援者講習会の実施



実際に機能するか防災訓練で確かめよう！

愛知県蟹江町 富吉グリーンハイツ町内会・中瀬台町内会
ひなん誘導訓練の実施

ひなん訓練&いもに会のご案内

日時:3月17日(土)10:00~12:00
場所:三角グラウンド(雨天決行)

メニュー1

地震発生！早く安全にひなんできるかな？
ひなんルートと移動方法を確認しよう

1. 放送が流れたら、裏面の決められたひなんルート、場所に移動します。
2. ひなんする時には、「非常持ち出し袋」を持参してください。
3. 「災害時の支援名簿」に登録されている方は、「地域支援者」の方と一緒にひなんします。



おいしい芋汁
食べに来てね～！



メニュー2

炊き出しの芋汁を食べながら、
要援護者の避難方法について学ぼう

当日ご参加頂いた方には、地域のボランティアさん
によるあったか芋汁と粗品をプレゼント！

車椅子や担架での移動、目の不自由な方や耳の聞こえない方、小さなお子さんとのひなん誘導方法についても学びます。

[取り組みのポイント]

①確認する！

モデルとして選ばれた方の災害時ひなんカードをもとに、地域支援者が避難誘導を行い、問題点などを洗い出す。

②楽しむ・交流する！

参加者の増大とお互いの顔つなぎをねらって、芋煮会と抱き合わせで行う。

③技術を見につける！

有効な避難方法について具体的に学ぶ。



要援護者のひなん誘導訓練

[ひなんまでの手順]

- ①地域支援者が自宅までお迎え
- ②扉に「避難完了」のカード
- ③要援護者をひなん所まで誘導







「あら～、とっても久しぶり」「会えてよかった！」
「周りの人が親切にしてくれる。安心して避難できる」
「俺にもこれぐらいは手伝える」 『記憶する』



参加者（災害時要援護者）の声

- 2階の体育館へ上がる際、4人の方に助けていただいた。地域愛を感じた。
- 初めてこのような訓練に参加した。支えてくれる方がいて安心した。
- ありがたかった。普段から知っている方が迎えに来てくれて良かった。
- 小学校の北側道路を横断してきた。車もよく走っており、災害時に安心してその道路が渡れるか心配。

出てくれば、知っている「人と会える」「安心する」
「役に立てた」という喜びと充実感を得ることも・・・
次も参加しよう！という気持ちが醸成される

避難行動要支援者のひなん誘導

- ・要援護者は黄色のリボン、地域支援者は青のリボンを目印につける。
- ・自宅からひなん所まで誘導する。



施設ではたらく障害者の寮から、地域支援者となった住民が知的障害者をひなん誘導。



要援護者搬送方法（30分）

消防署と消防団により、車椅子・担架などでの要援護者の搬送方法を指導して頂いた。子どももけが人役で参加。

「初めて車椅子を押した」という方多数

防災ミニ勉強会（15分）

写真などを使って…

- ①地域で予測される被害を知る
- ②発災後の被害のイメージを持つ

「なぜ防災対策を地域で今やらなければならないのか？」

の意識付け



非常持ち出し袋チェック



炊き出し「芋煮」



防災〇×クイズ

- ・初めての取り組み。来年もやってほしい。
- ・楽しかった！また参加したい。
- ・ベランダから見ている住民も多数。来年度の参加者増に期待大！
- ・今回の反省点を次回に生かして、継続的に取り組む意義を感じた(町内会長)

いつも助けられるだけの存在にしない
愛知県岡崎市根石中4丁目町内会

災害時要援護者夜間避難誘導訓練









炊き出しを食べながら住民同士
でコミュニケーションを深める



参加した要援護者の声

- ・訓練が夜間だったので、日中より恐怖感や不安感が増した。でも、支援下さった方が知っている方ばかりだったので、安心感があった。
- ・もしも訓練じゃなかったらどうなっていたか・・・と改めて考えるきっかけになった。
- ・**いつも迷惑ばかりかけて生活しているので、自分が訓練に参加することでお役にたてるのがとてもうれしい。**
- ・途中から雨が降り、寒かった。非常持ち出し袋には1週間分の薬、お茶、水、カロリーメイトなどを入れて持っていった。明かりが少ないと不安だが、周囲の皆さんが声をかけてくださり安心できた。
- ・次回もまた参加したい。

【切り口】在宅避難者の安否確認／中学生と要援護者
2008年 岡崎市藤川西部町内会
中学生と一緒に取り組んだ防災訓練



防災訓練での中学生の役割

1. 避難所に避難せずに自宅にいる方を地図でチェックする。
2. 2～3名を1班とし、地図を持って自転車で直接訪問をする。
3. 訪問シートにもとずき、当事者や家族に聞き取りをする。(身体状況、家の被害、その他の困りごと)
4. 必要に応じて、食事や水・物資など生活用品を運ぶ。



地図をチェックして、役割分担決めて、さあ、自転車でスタート！

帰ってきたらお互いの情報を共有

中学生が聞き取ってきたこと

- 自閉症の家族を訪問。家族から当事者について「人とのコミュニケーションが苦手、一人で動けるが集団の中で生活するのは難しい」という説明を受ける。実際に家での様子は、こちらから働きかけてもあまり動かないように感じた。
- 高齢者世帯を訪問。食事は経管栄養のため、普通のご飯は食べられない。以前に足を骨折してから寝たきりになってしまった。
- 一人暮らし高齢者を訪問。家族はいるが、外で暮らしているとのこと。実際に災害にあった時、家族がいないので大丈夫だろうかと心配になった。

中学生が要援護者の避難誘導係 坂道の大変さを知る



当事者や施設職員のアドバイスをもらいながら、注意を払いつつ、一生懸命に取り組む



避難所。でも出入り口には段差が・・・ コンパネで手作りスロープを作る



電動車いすでも安全に下りられた



訓練に参加した重症心身障害者の親の聞き取りから ～2008年度 岡崎市藤川西部町内会～

- ・子どもをつれて初めて参加。
- ・地域の方から声をかけて下さったので参加しようと思った。
- ・訓練に参加して、**日ごろ顔を少し知っているな、と思っていた人が声をかけてくれてうれしかった。**
- ・近所からの声かけが無かったら、みなさんに迷惑がかかるという気持ちが強く、このような訓練に自分から参加しようと思わなかった。
- ・実際に接して触れてもらって、周囲の人に「こんな子どももいるんだ」ということを知ってもらういい機会だと思った。
- ・避難所に「要援護者待避所」が設置されたことで、自分たちの居場所ができたようで、安心して会場にいられた。**参加できて本当によかった。**



町内会長コメント

- ・最初から100点満点を目指さない。
まずは、ひとりでも要援護者が参加してくれたら一歩進んだと考えようと、全体で合意した。
 - ・訓練当日までに、避難行動要支援者のお宅へ4回程度訪問した。
 - 1回目: 顔合わせ・台帳作成の意義や内容の説明
 - 2回目: 登録への声かけ、登録
 - 3回目: 地域支援者のお知らせ、防災訓練への参加呼びかけ
 - 4回目: 防災訓練の参加有無の最終確認と訓練内容の説明
- ※4回の訪問を通じて、当事者や家族との信頼関係が深まった。

特に障がい者世帯は、最初どのように接してよいか分からず、「腫れものに触るような」感覚でいたが、会話を重ねることにより、壁を作っているのは自分たちの方だと気づいた。家族の意向や障がいの状況が理解でき、地域の助け合いが必須であること、自分たちが支援者として手を出せる範囲がわかった。

港区港楽学区4町内合同 ひなん所運営委員会の取り組み

[地域の特徴]

- 東海・東南海地震では震度6強以上。
- 埋立地のため液状化の危険が高い。
- 堀川に囲まれており、川よりも土地が低い。
- 伊勢湾台風ではひざ下まで水に浸かった。
- ひなん所は学区内に6箇所。
- 学区内は約4000世帯。

[訓練までの準備]

- ①ひなん所運営委員会の立ち上げ
(学区内で希望する4つの町内会の代表者で構成)
- ②ひなん所運営訓練での活動メニューの検討
- ③高齢者や障がい者に必要なサポート方法講習会の実施



訓練内容のメニュー

- ①初期消火およびひなん所誘導訓練
- ②ひなん所での入居者把握訓練
- ③ひなん所についての講義
- ④手作りトイレの設置訓練
- ⑤AED確認訓練
- ⑥要援護者の移動サポートと情報伝達訓練
- ⑦男の炊き出し訓練





ひなん者名簿の記入

困りごと相談窓口の設置

「トイレへの付き添いが必要」「体調が悪い」など日常生活でサポートが必要な方や避難所生活で不安や心配事のある方の相談を受け付けました。

ヘルプリボンとサポートリボン

名簿登録(ひなんしゃカードの記入)時に、避難所生活でお手伝いが必要な方にはピンクリボンを、困っている人やことのお手伝いができる方にはブルーリボンを配布しました。



こうらくしょうがっこう
港楽小学校 ひなんしゃカード

このカードは1世帯1枚ずつ記入して頂きます。記入後は名簿受付まで提出してください。

にゅうきよつきひ つき ひ
 入居月日： 月 日

しよぞくくめい しよぞくがっく しよぞくちやうない
 所属区名： 所属学区： 所属町内：

せたいぬし きんきゆうれんらくさき でんわ
 世帯主： 住 所： 緊急連絡先（電話）：

家族名前	性別	年齢	体の調子	手伝いが必要か	困ること・不安なこと	お手伝い ボランティア登録
	男・女		よい・わるい	いる・いない	歩行困難・耳が遠い・目が見えにくい・認知症がある・発作・障がいがある(知的・精神・肢体不自由・内部・視覚・聴覚)・日本語があまりわからない・その他／	する しない
必要な手伝い	トイレなどへの移動・食事の手伝い・情報伝達 救援物資などの運搬・その他／					
家族名前	性別	年齢	体の調子	手伝いが必要か	困ること・不安なこと	お手伝い ボランティア登録
	男・女		よい・わるい	いる・いない	歩行困難・耳が遠い・目が見えにくい・認知症がある・発作・障がいがある(知的・精神・肢体不自由・内部・視覚・聴覚)・日本語があまりわからない・その他／	する しない
必要な手伝い	トイレなどへの移動・食事の手伝い・情報伝達 救援物資などの運搬・その他／					
家族名前	性別	年齢	体の調子	手伝いが必要か	困ること・不安なこと	お手伝い ボランティア登録
	男・女		よい・わるい	いる・いない	歩行困難・耳が遠い・目が見えにくい・認知症がある・発作・障がいがある(知的・精神・肢体不自由・内部・視覚・聴覚)・日本語があまりわからない・その他／	する しない
必要な手伝い	トイレなどへの移動・食事の手伝い・情報伝達 救援物資などの運搬・その他／					

ちょっとした配慮

洋式トイレを手作り！床に座ることがつらい方のために壁際に平均台を並べたり、聴覚がい害の方にもわかるように紙による案内も行いました。





おいしい炊き出し(白米と豚汁)

お箸が使いにくいという方にはたねなし梅干が入ったおにぎりやスプーンを用意しました。また、炊き出しは女性がつくる！という概念を覆すべく、「男の炊き出し」を行いました。



要援護者から学ぶ

お手伝いが必要な方(要援護者)1人にお手伝い担当の方2人というチームを作りました。まずは要援護者の方が具体的にどんなお手伝いが必要なのかを教えます。





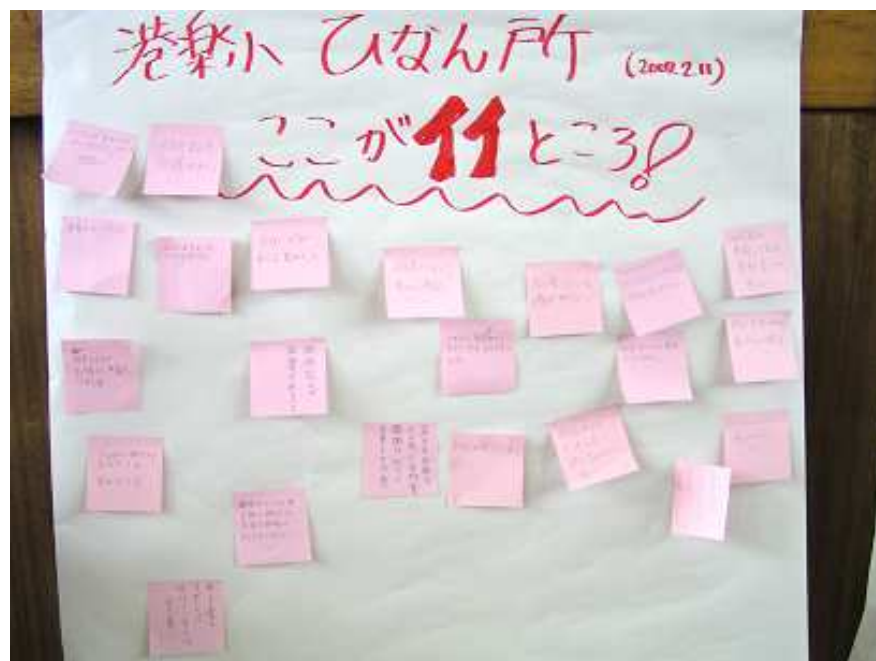
盲導犬とともに参加されて
要援護者も避難所で生活できるよう配慮を呼びかけるとともに盲導犬への理解や対応の仕方お話してくださいました。参加者全員にとってとても貴重なお話でした。

取り組みの成果

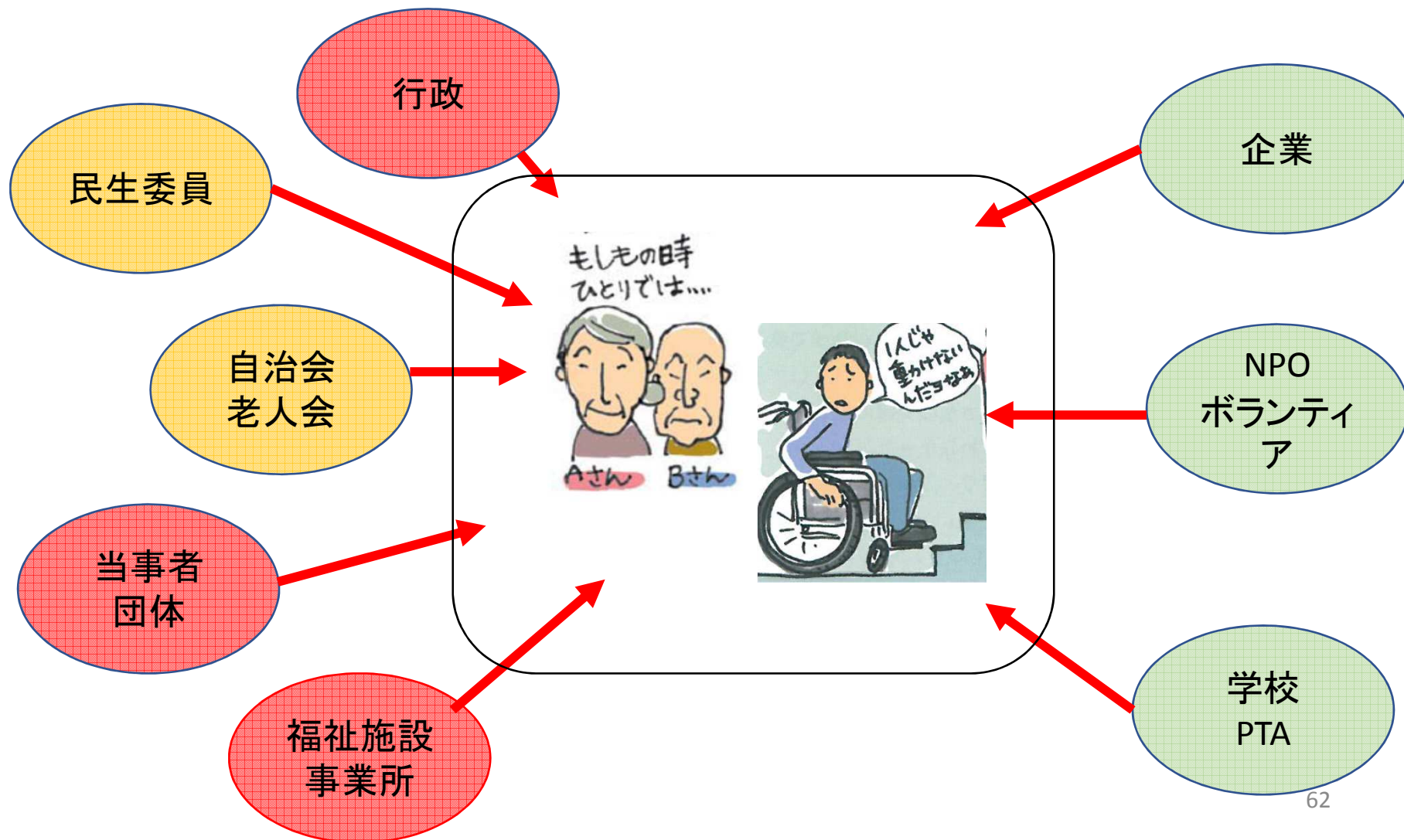
- ・住民レベルでも要援護者に配慮した避難所環境が整えられるということへの理解が深まり、主体的に関わることにより、全体の機運が醸成された。
- ・みんないち地域住民という立場で発言する場ができた。

体験してみても初めてわかる発見がたくさん

チームごとに避難所を回り、ひなん所の、よいところ、わるいところをチェックしました。



日常の取り組みを通じて
地域の色々な人たちと『協働』しよう！
ひとりにつながる人のパイプが増える



知っていればできること
練習すればできること
が沢山あります

防災を
互いの存在を記憶する
ためのきっかけづくりに

